

---

# トーマス・マン『ブッデنبローク家の人々』における変革期の市場競争

高辻 正久

## 1. はじめに

トーマス・マン (Thomas Mann, 1875-1955) の最初の長編小説『ブッデنبローク家の人々』(Buddenbrooks, 1901) は、19世紀のドイツ北部のハンザ同盟都市リューベックのある豪商一家の栄枯盛衰の物語である。ブッデنبローク家の最盛期から始まって、世代が替わるごとに徐々に衰退していき、商会の解散、そして最後の跡継ぎの夭逝までが四世代にわたって描かれている。この小説は、彼の初期の短編小説『トーニオ・クレーガー』(Tonio Kröger, 1903) などのように、いわゆる「市民的なものと芸術家的なものとの対立」を描いた作品と言われている。この物語の最初に登場するヨハン・ブッデنبローク商会の社主ヨハン・ブッデنبローク (Johann Buddenbrook) の明るく単純で強い性格と、彼の曾孫でブッデنبローク家最後の男子の跡継ぎであるハンノ・ブッデنبローク (Hanno Buddenbrook) の夢想家的で繊細な性格を対比させると、確かにそのような印象を受ける。

一方、この小説の副題「ある家族の没落」(*Verfall einer Familie*) に着目すると、ブッデنبローク家の少なくとも経済上の没落の過程の大部分は、ヨハンの息子ジャン・ブッデنبローク (Jean Buddenbrook) とジャンの息子トーマス・ブッデنبローク (Thomas Buddenbrook) がヨハン・ブッデنبローク商会の社主だった時代に起こっている。なぜなら、ジャンがヨハンから商会を引き継いでから、商売が縮小されてブッデنبローク家の資産は減少し始め、そのジャンの跡を継いだトーマスが亡くなったときに商会が解散されたからである。そしてトーマスの唯一の跡継ぎだった息子のハンノはまだ14歳で、たとえ2年後に彼がチフスに罹って亡くならなくても、商会の再建は難しかったと考えられる。なぜなら、まずトーマスの弟クリスティアン・ブッデنبローク (Christian Buddenbrook) は、

病気のためにすでに働けない状態だった。また、ハンノの母ゲルダ (Gerda) は商売にまったく関心のないヴァイオリンを弾く芸術家タイプだったし、トーマスの妹アントーニエ・ブッデンブローク (Antonie Buddenbrook) も、ブッデンブローク家の再興を強く望んではいたものの商売の知識や経験がなく、さらに若い頃の聡明さや洞察力を失っていたからである<sup>1)</sup>。このように、ブッデンブローク家の経済上の没落の過程の大部分はジャンとトーマスが商会の社主だった時代に起こったことと考え、この小説を彼らの社主時代に焦点をしばって読むと、「市民的なもの」と芸術家的なものとの対立」とは別の側面が際立ってくる。

この小説には、戦争や革命などの歴史的出来事に関する記述がしばしば見られる。物語られるのは 1835 年から 1877 年までの 42 年間におよび、この小説を読むことによって 19 世紀のドイツ史を垣間見ることができる。また、小説の主人公が商人であることから、特に関税同盟や景気、鉄道建設など経済的な出来事に関する記述が比較的多く見られることも特徴として挙げられる。

本稿では、『ブッデンブローク家の人々』をジャンとトーマスの社主時代に焦点をしばって読み、また歴史的出来事に関する記述にも着目しながら、この小説の主調をなすと言われている「市民的なもの」と芸術家的なものとの対立」とは別の側面について探ってみたい。

## 2. 『ブッデンブローク家の人々』におけるジャンとトーマスの社主時代

### 2.1. ブッデンブローク家の経済上の没落の過程

まず、『ブッデンブローク家の人々』の物語の概要について、ブッデンブローク家の経済上の没落の過程に視点を置いて確認する。

この物語は、1835 年 10 月に催されたヨハン・ブッデンブローク商会が買い取った大きな古い邸宅の披露宴から始まる。この邸宅は、リューベック市メング通りにあって、先住者のラーテンカンパ家によって 1682 年に建てられたものだった。ヨハン・ブッデンブローク商会は、1768 年にヨハンの父によって創立され、穀物の商売を行っている。この日のパーティーには、ブッデンブローク家の一族と彼らの友人たちが集まった。商会の社主ヨハンは当時 70 歳で、この頃がブッデン

---

1) 伊藤 (2014: 42-48) を参照。

ブローク家の最盛期だった。

1842年にヨハンが77歳で亡くなった後、40代半ばで商会を引き継いだ息子のジャンは、商売を縮小する。それでも彼は、商会を設立した祖先が残した訓戒「わが子よ、昼は仕事に喜びもて励め、されど、夜、安らかに眠れるごとき仕事にのみ励め！」<sup>2)</sup>を胸に刻み、仕事に励んだ。また、ジャンは市の商工委員会や会計検査委員会等の市民代表も歴任する。しかし、ヨハン・ブッデンブローク商会は、取引関係のあるブレーメンの商会の破産によって大きな損失を被り、またジャンの長女アントーニエが、夫ベンディクス・グリューンリヒ (Bendix Grünlich) の破産によって離婚し、娘エーリカ (Erika) を連れて戻って来るなど、マイナスの出来事が重なった。1850年から長男トーマスが商会の共同経営者となり、ジャンはというと、健康状態が悪化し、1855年の晩夏に自宅の寝室で突然亡くなった。

ジャンの死後、トーマスが29歳で社主として商会を引き継ぐ。彼の営業手法は、先代よりも独創的かつ積極的で、青田買いなどの冒険もした。1857年にトーマスは、アムステルダムの大商人の娘ゲルダ・アーノルドセン (Gerda Arnoldsen) と結婚し、1861年4月に長男ハンノが生まれる。トーマスは商会の仕事に加え、税金・鉄道・郵便などに関する市政の仕事もこなし、それによって市民からの信望も高まり、1862年には市参事会員に選ばれた。さらに、1864年に大きな邸宅を新築し、妻と息子と共に移り住んだ。

しかし、その後ヨハン・ブッデンブローク商会の商売は次第に芳しくなくなり、たびたび損失を被った。また、トーマスの弟クリスティアンがハンブルクで商売に失敗し、さらに病気で仕事を辞めて療養することになる。1868年には、妹アントーニエに勧められたペッペンラーデの穀物の青田買いにも失敗する。この頃からトーマスは、家庭での食事を簡素にしたり、召使の数を減らすなど節約するようになった。そして、1871年の秋にトーマスの母エリーザベト (Elisabeth) が肺炎で亡くなると、1835年に買い取ったブッデンブローク家の古い邸宅は売られることになり、翌1872年にライバルのシュトゥルンク・ハーゲンシュトレーム商会がそれを買取った。

ヨハン・ブッデンブローク商会の商売はその後も沈滞したままで、トーマスの健康状態も徐々に悪くなっていった。1875年1月のある土曜日に、トーマスは市

2) Mann (2002: 190). 日本語訳は望月 (1969上: 252)。

参事会の会議を途中で抜け出して歯科医で抜歯するが、帰りに車道で卒倒し、その日のうちに亡くなってしまふ。まだ49歳だった。彼の遺言により、ヨハン・ブッデンプローク商会は清算して解散することになり、1864年に新築した大きな邸宅も売られ、ゲルダとハンノは小さな邸宅を買って移り住んだ。しかし、2年後の1877年にハンノはチフスに罹って16歳で夭逝し、ブッデンプローク家の男子の系統は絶えた。

## 2.2. ジャンとトーマスの社主時代の実績

以上のように『ブッデンプローク家の人々』をブッデンプローク家の経済上の没落の過程に視点を置いて読むと、その過程のほとんどが、ジャンとトーマスがヨハン・ブッデンプローク商会の社主だった時代に起こっていることがわかる。また、彼らが社主だった期間は、ジャンが1842年から1855年の13年間、トーマスが1855年から1875年の20年間で、合わせて33年間である。これは、物語全体の期間42年間（1835～1877年）の約8割を占めている。

1842年に商会を継いだジャンは商売を縮小するが、父ヨハンが亡くなったときの相続・贈与により減少した財産を回復するべく努力する。彼は慎重第一をモットーに商売を行ったが、仕事は増大しなかった。そして、取引関係のあるブレーメンの商会の破産により8万マルクの損失をし、さらに婿グリューンリヒの破産により長女アントーニエの持参金8万マルクを失う。しかし、妻エリーザベトの実家の遺産として30万マルクを相続したおかげで、ジャンは死後に不動産以外の資産を75万マルク遺せた。この金額は、ヨハンの最盛期の90万マルクより15万マルクの減少だった<sup>3)</sup>。

ジャンの死後、29歳の若さで商会を引き継いだトーマスの営業手法は、父よりも独創的かつ積極的だった。1857年にゲルダと結婚した際には、30万マルクの持参金が入る<sup>4)</sup>。さらに1862年には市参事会員に選ばれ、この頃までは商売も順調だった。しかしながら、1864年に10万マルク以上かけて大きな邸宅を新築した頃から商売が次第に芳しくなくなり、たびたび損失を被るようになる。1866年には、取引関係のあるフランクフルトの商会が倒産したために、6万マルクを失っ

---

3) Vgl. Mann (2002: 279-280).

4) Vgl. Mann (2002: 320).

た。さらに、1868年に4万マルクを投資したペッペンラーデの穀物の青田買いの失敗や弟クリスティアンの商売の失敗・病気などによって資産が減り、1871年に母エリーザベトが亡くなると、10万マルクで購入したブッデンブローク家の古い邸宅を8万7000マルクで売らざるを得なくなった<sup>5)</sup>。その後もヨハン・ブッデンブローク商会の商売の不調は続き、1875年にトーマスが49歳で急死したときに遺された遺産は65万マルクを下回る金額だった<sup>6)</sup>。

ジャンとトーマスの営業手法はそれぞれ異なったが、二人ともヨハン・ブッデンブローク商会の発展のために最後まで懸命に働いた。しかし、彼らの社主時代の33年間で、ブッデンブローク家の資産はヨハンの最盛期よりも約3割減り、1835年に買い取った古い邸宅も失った。そして、トーマスの遺言により商会は解散することになり、さらにその業務整理が不利に進んだ結果、1864年に10万マルク以上かけて新築した邸宅も7万5000マルクで売られることになった<sup>7)</sup>。ジャンの社主時代に妻エリーザベトの実家の遺産として30万マルクが入ったことと、トーマスの社主時代に妻ゲルダの持参金として30万マルクが入ったことも考慮すると、彼らの社主時代の商売はかなり不振であったといえる。

またErnst Kellerは、ヨハンとジャン、トーマスのそれぞれの社主時代に得た商会の利益を比較している。それによると、ヨハンが社主時代に20万マルクの利益を上げたのに対して、ジャンは9万マルク、トーマスは4万2000マルクで、代が替わるごとに利益が半分以下に減少していることを指摘している<sup>8)</sup>。

### 3. ヨハン・ブッデンブローク商会の衰退を際立たせる歴史的出来事の記述

#### 3.1. ヨハン・ブッデンブローク商会の経営と関連のある歴史的出来事の記述

次に、『ブッデンブローク家の人々』における歴史的出来事に関する記述の中から、ヨハン・ブッデンブローク商会の経営と関連のある記述を見ていく。そして、この商会と歴史的出来事の記述との関係について考察したい。

---

5) Vgl. Mann (2002: 50, 656).

6) Vgl. Mann (2002: 768).

7) Vgl. Mann (2002: 769).

8) Vgl. Keller (1988: 168-169).

### 3.1.1. ドイツ関税同盟に関する記述

まず、1835年10月に催されたヨハン・ブッデンブローク商会が買い取った邸宅の披露宴において、食後にジャンが商人仲間たちと市のドイツ関税同盟（Deutscher Zollverein）への加入の是非について話し合う場面がある。穀物を輸入しているヨハン・ブッデンブローク商会にとって、関税は重要な問題だった。

19世紀のドイツ統一のための重要な足場となったドイツ関税同盟は、前年の1834年1月1日に発足していたが、リューベックはまだ加入していなかった。市のドイツ関税同盟への加入に対して疑問を持つ仲買人グレーチェンス（Grätjens）は、ジャンに次のように言う。

「その関税同盟が、…… 私にはわかりませんね。私たちの制度は、簡単明瞭で、実際的ではありませんか、ええ？ 市民の宣誓にもとづいて通関手続きをする……」<sup>9)</sup>

ジャンは市のドイツ関税同盟への加入に賛成だったが、この日の話し合いでは賛成派と反対派が半々だった。反対意見には、市の自主性と独立性を守りたいというものもあった<sup>10)</sup>。ドイツ関税同盟に関する記述については、後でさらに取り上げる。

### 3.1.2. 鉄道建設に関する記述

また、1858年のある朝に、トーマスが理髪屋ヴェンツェル（Wenzel）と市の鉄道政策について話し合う場面がある。馬車よりもいっそう速く大量の荷物を運べ、採算性の高い鉄道の建設は、穀物の商売を行っているヨハン・ブッデンブローク商会にとって重要な問題だった。

「ぼく [トーマス] は、この市の鉄道政策に興味を持っていてね。ぼくたちの家の伝統らしいね。ぼくの父 [ジャン] も、すでに1851年からビューヘン鉄道の上部の一人だったからね。ぼくが32歳でそちらに選ばれたのも、父の七光り

---

9) Mann (2002: 44). 日本語訳は望月 (1969 上: 57)。

10) Vgl. Mann (2002: 44).

があったからだろうね。ぼくの働きは、これからだがね。……」<sup>11)</sup> (括弧内筆者)

トーマスも父ジャンと同様に、鉄道会社の理事会の一員を務めていた。ドイツで最初に鉄道が敷設されたのは1835年だったが(ニュルンベルク-フュルト間の約6キロメートル)、本格的に普及するのは1850年代以降で、1850年から1870年までの20年間に、鉄道網は5859キロメートルから1万8876キロメートルまで約3.2倍に増えた<sup>12)</sup>。リュウベックは1851年に、ハンブルク・ベルリン間の路線に支線につながれている<sup>13)</sup>。ジャンとトーマスは、まさにドイツの鉄道普及期に市の鉄道政策に携わっていたのだ。

### 3.1.3. 普墺戦争に関する記述

ヨハン・ブッデンブローク商会の経営と関連のある歴史出来事の記述として、戦争に関する記述もいくつかある。たとえば1866年に起こった普墺戦争について、次のように書かれている。

戦争が始まり、勝利がいくども怪しくなり、決定的になり、ハンノ・ブッデンブロークの町は、賢明にもプロシアに加担をしていた関係で、富裕なフランクフルトがオーストリアを信じていたばかりに、自由都市でなくなったのを見て、ひそかにほくそ笑んでいられた。しかし、その年の7月、休戦になる直前に、フランクフルトの大きな商会が倒産し、そのために、「ヨハン・ブッデンブローク商会」は、一挙に2万ターラー [= 6万マルク] という大金を失った<sup>14)</sup>。(括弧内筆者)

普墺戦争においてプロイセン軍は、オーストリアに加担したフランクフルトも占領した。ヨハン・ブッデンブローク商会にとって不運なことに、取引関係のある商会がフランクフルトにあったために、大きな損失を被ってしまう。当時トーマスの息子ハンノはまだ5歳で、子供の遊びにふけていた。

11) Mann (2002: 394). 日本語訳は望月 (1969 中: 165)。

12) 成瀬ほか (1996: 351) を参照。

13) Vgl. Heftrich / Stachorski (2002: 320)。

14) Mann (2002: 480). 日本語訳は望月 (1969 中: 275-276)。

### 3.1.4. 普仏戦争に関する記述

また、普仏戦争（1870～1871年）に関する記述として、ドイツ帝国が設立された1871年の秋のある日に、トーマスが彼の母の診察に訪れた医師たちと次のような会話をしている場面がある。

「これで、いい時代がくると思いますが、参事会員 [トーマス] さん？ 景気がどこもいいようですし、どこも活気がみなぎっているようですから。……」

参事会員 [トーマス] は、それを肯定も否定もしなかった。戦争の勃発で、ロシアからの穀物の輸入が飛躍的に多くなったことを認め、戦争中に軍隊の需要に応じるために燕麦が多量に輸入されたことを話した。しかし、先方ばかりを儲けさせるだけで終わったとも言った<sup>15)</sup>。(括弧内筆者)

トーマスの率いるヨハン・ブッデンブローク商会は、普仏戦争による穀物の需要の増大や、その後のドイツ帝国における好景気の波に乗ることができなかった。穀物の輸入が増えても儲からなかったということは、ヨハン・ブッデンブローク商会にとって不利な条件で穀物売ることになってしまったのだろう。

翌1872年の初めには、ブッデンブローク家は1835年に買い取った古い邸宅を売らざるを得ない状態だった。ドイツの発展と繁栄に関する記述が、ブッデンブローク家の衰退を一層際立たせているように映る。

## 3.2. ドイツ関税同盟をめぐるジャンとトーマスの態度

『ブッデンブローク家の人々』におけるヨハン・ブッデンブローク商会の経営と関連のある歴史的出来事の記述の中では、ドイツ関税同盟に関する記述が特に目を引く。このドイツ関税同盟に対するジャンとトーマスの態度について見てみたい。

まずジャンは、1835年10月に催されたブッデンブローク家の邸宅の披露宴において、集まった商人仲間たちに、ドイツ関税同盟について次のように述べている。

---

15) Mann (2002: 614). 日本語訳は望月 (1969 下: 75)。



「機会があり次第、私たちも同盟にはいることですね。[中略] 関税同盟に加入すれば、メクレンブルクもシュレースウィッヒ＝ホルシュタインも、私たちに門戸を開くでしょう。……それに自家営業もどんなに盛んになるか、予測できませんからね。」<sup>16)</sup>

当時のジャンは、まだヨハン・ブッデンブローク商会の社主ではなかったが、共同経営者だった。彼はリュubeckのドイツ関税同盟への加入に賛成だった。

また、トーマスも 1858 年のある朝の理髪屋ヴェンツェルとの会話の中で、ドイツ関税同盟について次のように述べている。

「関税同盟へ加入しなくてはならないよ。もう迷っている時期じゃないね。ぼくがそれで闘い始めたら、君たちも協力して闘ってくれなくちゃね。[中略] 海を持っていない町、そして、メクレンブルク、シュレースウィッヒ＝ホルシュタインは、ぼくたちに門戸を開くようになるだろうが、北との貿易が昔日の俵がなくなったこの町にとって、これはいっそうありがたいことだろうね。」<sup>17)</sup>

ジャンもトーマスも、商売のための市場を拡大するために、自分たちの市がドイツ関税同盟に加入することを強く望んでいた。

関税同盟とは、二つ以上の国が互いに経済交流を密にするために、共同の関税地域を設けることを協約することである。その地域内では、交易品に対する関税を廃止するとともに、地域外の国々に対しては同一の関税を適用する。ただしドイツ関税同盟の場合、関税による国内産業の対外的保護よりも、加盟国相互間の関税の撤廃にともなう国内産業のための市場の拡張の方に重点が置かれていた<sup>18)</sup>。

ドイツ関税同盟の基礎となったのは、プロイセンが 1818 年に国内関税の撤廃を関税法により定めたことだった。19 世紀初頭のドイツは多数の領邦国家が群立していて、それぞれの領邦の内部がさらに多数の関税領域に細分されているとい

16) Mann (2002: 44). 日本語訳は望月 (1969 上: 56-57)。

17) Mann (2002: 396-397). 日本語訳は望月 (1969 中: 168)。

18) 成瀬ほか (1996: 254-255) を参照。

う状態だった。このような経済的分裂を克服するために、まず領邦内の内部関税を廃止して領邦間に国境関税を設け、それによって領邦的規模で統一的な経済領域を創出した<sup>19)</sup>。そしてこれ以降、複数の領邦国家が共同の関税領域を形成する方法によってプロイセンがドイツにおける関税の障害を排除する政策を主導し、1836年までにドイツ関税同盟は25カ国2500万人の人口を有するまでになった<sup>20)</sup>。

リュールベックがドイツ関税同盟に加入したのは比較的遅く、1868年だった<sup>21)</sup>。この時ジャンはすでに亡くなっており、トーマスにとってはようやく念願がかなったように見えたが、1872年のヨハン・ブッデンブローク商会の状況については、次のように書かれている。

[中略] 町が関税同盟へ加入して、小っぼけな小売店も数年でりっぱな問屋になれる時勢であって、すべてが活気にあふれて躍動している現在、「ヨハン・ブッデンブローク」商会だけは、時代の波が運んでくる産物からプラスを引き出すこともなく、沈滞したままであって、景気をたずねられると、社主〔トーマス〕は、元気なく手をふって答えた、「ああ、あまりよくはありませんね。……」<sup>22)</sup> (括弧内筆者)

1872年はドイツ帝国成立の翌年であり、フランスからの賠償金50億フランの流入によって、投資熱やグリュンダーツァイト(Gründerzeit)と呼ばれる会社設立ブーム(1871～1873年)が広がっていた時期である。自分たちの市がドイツ関税同盟に加入し、国内の景気も良かったにもかかわらず、トーマスはヨハン・ブッデンブローク商会を発展させることができなかった。

リュールベックのドイツ関税同盟への加入によって、ヨハン・ブッデンブローク商会にとって市場は広がった。しかし、それによって競争相手が増加し、価格競争も激化して、競争力の弱い会社にとっては逆に厳しい環境になったのだろう。

---

19) 諸田(1974:6-7)を参照。

20) 若尾/井上(2005:112-114)を参照。

21) Vgl. Heftrich/Stachorski(2002:247)。

22) Mann(2002:672-673)。日本語訳は望月(1969下:150)。

#### 4. 『ブッデンブローク家の人々』における変革期の市場競争

##### 4.1. 変革期に商会を経営したジャンとトーマス

『ブッデンブローク家の人々』をジャンとトーマスが商会の社主だった時代に焦点をしばって読み、さらに彼らの商会経営に関わる歴史的出来事に着目すると、産業革命による社会の変革期において仕事が山積している経営者の物語という印象を受ける。19世紀初頭にはまだ農業国だったドイツの工業化を牽引したのは、ドイツ関税同盟と鉄道建設であったと言われるが<sup>23)</sup>、ジャンもトーマスも市のドイツ関税同盟への加入について論じ、市の鉄道政策に携わっていた。また、鉄道により穀物搬入が容易になり、価格競争が起こった<sup>24)</sup>。穀物の商売を行っているヨハン・ブッデンブローク商会は、まさに変革の波にさらされていたのである。

1858年のある朝、商会の社主になってまだ3年目のトーマスは、理髪屋ヴェンツェルに時代の変化について次のように話している。

「ヴェンツェル、時代は変わっているからね。新しい時代に対処するには、仕事が山ほどあるからね。ぼくのまだ小さかったころのことを考えると。[中略]あれからさまざまな変化があったし、今後も変化するだろうからね。……」<sup>25)</sup>

19世紀ドイツは産業革命の進展にともなう工業化によって、1850年からの20年間に社会的総生産は2倍に増えた<sup>26)</sup>。また、1850～1875年において、経済成長は年平均2.5パーセントを維持し、1860年代後半から1870年代初めまでは、4.4パーセントという高い水準だった<sup>27)</sup>。これらの期間は、トーマスがヨハン・ブッデンブローク商会の社主だった時代（1855～1875）とほぼ重なっている。

トーマスは時代の変化を十分意識し、それに対処しようとしていた。それだけに彼の経営の苦戦が、一層際立って映る。

---

23) 成瀬ほか（1996：238-240）を参照。

24) 若尾 / 井上（2005：115）を参照。

25) Mann（2002：396）。日本語訳は望月（1969中：167）。

26) 成瀬ほか（1996：350-352）を参照。

27) 木村編（2001：218）を参照。

#### 4.2. シュトゥルンク・ハーゲンシュトレーム商会との競合

ジャンとトーマスが商会の社主だった時代の最大の競合相手として、輸出業をしているシュトゥルンク・ハーゲンシュトレーム商会が挙げられる。『ブッデンブローク家の人々』において、この商会を率いるハーゲンシュトレーム家の人々が最初に登場するのは1838年の夏で、当時まだ11歳だったジャンの長女アントーニエが学校へ行く途中、シュトゥルンク・ハーゲンシュトレーム商会の経営者ヒンリヒ・ハーゲンシュトレーム (Hinrich Hagenström) の長男ヘルマン・ハーゲンシュトレーム (Hermann Hagenström) と長女ユールヒェン・ハーゲンシュトレーム (Julchen Hagenström) とお互いの家の財産や食事について自慢し合う場面がある<sup>28)</sup>。この頃からヨハン・ブッデンブローク商会とシュトゥルンク・ハーゲンシュトレーム商会はライバル関係で、子供たちもそのことを意識していた。これ以降、シュトゥルンク・ハーゲンシュトレーム商会はこの物語においてたびたび登場し、ヨハン・ブッデンブローク商会とは対照的に日増しに栄えていく。両社は、変革の時代における「勝ち組」・「負け組」として描かれているように見える。

シュトゥルンク・ハーゲンシュトレーム商会の隆盛に特に貢献したのはヒンリヒの長男ヘルマンで、彼はトーマスと年齢が近く、1851年から経営に携わっていた<sup>29)</sup>。トーマスは1850年に商会の共同経営者になっているので、彼らの商会を経営した時期は、ほぼ重なっている。1862年に行われた市参事会員の選挙のとき、トーマスと同様に候補者となったヘルマンに対する市民の印象については、次のように書かれている。

ヘルマン・ハーゲンシュトレームは確かに注目と尊敬に値する人物であった。こういう男の新奇で、そのために魅力を感じさせるところ、他の候補者からこの男を際立たせ、多くの市民の目に指導者めいた立場に映じた点は、この男の人格の基調である自由主義者的な、寛大な考え方であった。この男が金を儲けて、金を散じている気軽さ、大まかさは、同じ商人間ものこつこつとした、辛抱づよい仕事ぶり、きびしく伝えられてきた家憲にしばられている仕事ぶりとは、大ちがいであった。伝統と敬虔な気持の窮屈な束縛にしばられずに、自分の足だけの上に

---

28) Vgl. Mann (2002: 66-69).

29) Vgl. Mann (2002: 260).

立ち、古い暖簾などには無関係であった<sup>30)</sup>。

この記述からは、ヘルマンが産業革命の進展などによる経営環境の変化の中で、伝統的な商売のやり方に縛られず、状況に柔軟に対応できる商人という印象を受ける。また、トーマスもヘルマンを優れた商人として認めていた。1871年の秋に、ブッデンブローク家の古い邸宅の購入をヘルマンが希望していることを聞いて彼のことを非難するアントーニエに対し、トーマスは次のように言う。

「あの男 [ヘルマン] のどこが悪いの？ 商売の上で、ぼくをずっと凌いでいるし、お金のことで、ぼくをライバルにして成功を博するだろうが、—それでけっこうじゃないか。それは、あの男がぼくよりも商人としてまさっていて、政治的にもすぐれていることではないか。[中略]『シュトゥルンク・ハーゲンシュトレーム』商會が、今日の隆盛を見たのは、主 [神] の力ではなく、あの男だけのお陰だつてことは、公平に見てだれも認めないではいられないがね。……」<sup>31)</sup> (括弧内筆者)

トーマスも商會の経営において、先代よりも獨創性を發揮し、ときどき冒険も行った。しかし、川戸れい子はトーマスが小売店を輕視するような発言をした例を挙げて、彼の価値観が小売店嫌いだつた祖父ヨハンとあまり違わなかつたことを指摘している<sup>32)</sup>。また、彼の共同經營者フリードリヒ・ヴィルヘルム・マルクス (Friedrich Wilhelm Marcus) は、石橋を叩いて渡るような慎重な人物で、ヨハン・ブッデンブローク商會の商売の歩みにブレーキをかける役目を務めていた。たとえば、トーマスが商會の傳統に反してペッペンラーデの穀物の青田買いをしたときには憤慨し、一切の責任を負わないとまで言っている<sup>33)</sup>。ジャンの社主時代からヨハン・ブッデンブローク商會の経営に支配人として協力していて、トーマスよりも年配だつたマルクスの存在は、トーマスに商會の傳統的なやり方を重視することを促していたと推察される。

ヨハン・ブッデンブローク商會とシュトゥルンク・ハーゲンシュトレーム商會

30) Mann (2002: 450). 日本語訳は望月 (1969 中: 236)。

31) Mann (2002: 660-661). 日本語訳は望月 (1969 下: 133-134)。

32) 川戸 (1998: 98-99) を参照。

33) Vgl. Mann (2002: 523-524)。

の競合を『ブッデンブローク家の人々』の物語の一つの軸と見るならば、ブッデンブローク家の古い邸宅がハーゲンシュトレーム家によって1872年の初めに実際に買われたことが物語のクライマックスであろう。なぜなら、この邸宅はブッデンブローク家の最盛期に買い取ったもので、物語の最初から舞台の中心だったからである。また斎藤成夫は、この「本家の売却はブッデンブローク家の商家としての衰退を象徴化している」<sup>34)</sup>と言っている。37年前の1835年10月に催された邸宅の披露宴において、食事中にジャンが友人たちにこの邸宅の歴史と前の持ち主について話す場面がある。

「1682年の冬に建てられました。当時『ラーテンカンブ商会』は、日の出の勢いで栄え始めたところでした。……その商会が、この20年間に、あのように左前になったのは、人ごととは思えないことです。……」

食卓の談話がとぎれ、30秒間ほど沈黙がつづいた。みんなは、皿の上に目を落とし、家を建て、ここに住み、貧しくなり、零落し、どこかへ去ってしまったかつて羽振りのよかった家族のことを考えた<sup>35)</sup>。

ブッデンブローク家の邸宅の前の持ち主であったラーテンカンブ家は、最近の20年間で家を手放さなければならないほど零落してしまったとジャンは言っているが、トーマスが商会の社主を務めた期間も20年間(1855～1875年)だったことは皮肉である。トーマスはこの邸宅を1872年に売った後、新しい分野を開拓する野心と気力を失っていき、一人息子のハンノに商会を継がせることもあきらめて、3年後に亡くなった。

## 5. おわりに

トーマス・マン『ブッデンブローク家の人々』を、歴史的出来事に関する記述に着目しながらジャンとトーマスの社主時代に焦点をしばって読むと、産業革命による変革の時代に必死に生き残りを図ろうとする経営者の物語という印象を受ける。ジャンもトーマスも、商会の社主になってから人生の最後まで仕事に没頭

---

34) 斎藤 (2013: 28)。

35) Mann (2002: 25). 日本語訳は望月 (1969 上: 29-30)。

し、突然亡くなった。トーマスなど亡くなる当日にも、市参事会の会議に出席していた。この点、晩年に仕事を引退した後に、自宅のベッドで家族に囲まれて安らかに亡くなったヨハンとは対照的である。しかし、これほど一生懸命に働いたジャンもトーマスも、「ヨハン・ブッデンブローク商会の発展」という目標を成し遂げられなかった。

Yvonne Holbeche は、この小説がヨハン・ブッデンブローク商会の物語によって、家族の年代記を客観化しただけではなく、普遍化したと述べている。なぜなら、この商会の物語は、19世紀ドイツの商業のある特有の形態の没落を反映しているからだという<sup>36)</sup>。しかし、ジャンとトーマスが商会の社主として奮闘した物語には、現代性も感じる。なぜなら、現在はIoT (Internet of Things) やAI (artificial intelligence) の導入による第四次産業革命の時代と言われ、あらゆる産業分野で変革が起き、企業にとって大きく飛躍できるチャンスがある一方で、競争に負ければ一気に沈没する可能性もあるからだ。ヨハン・ブッデンブローク商会の没落とシュトゥルンク・ハーゲンシュトレーム商会の隆盛は、まさにこのことを描いている。『ブッデンブローク家の人々』は約120年前に書かれた小説だが、物語の時代背景と主人公の関係が、現代の経営者を取り巻く環境にも相通するものがあると思う。ヨハン・ブッデンブローク商会の没落の物語に対し、人ごとではないと感じる経営者は、現代にも少なからずいるのではないだろうか。

## 参考文献

### 一次文献

Mann, Thomas (2002): *Buddenbrooks. Verfall einer Familie*. Frankfurt am Main: Fischer.

トーマス・マン (1969) 『ブッデンブローク家の人びと (上) (中) (下)』(望月市恵訳) 岩波文庫。

### 二次文献

Heftrich, Eckhard / Stachorski, Stephan (2002): *Thomas Mann Buddenbrooks Kommentar*. Frankfurt am Main: Fischer.

Holbeche, Yvonne (1988): Die Firma Buddenbrook. In: Ken Moulden / Gero von Wilpert

36) Vgl. Holbeche (1988: 244).

(Hrsg.): *Buddenbrooks-Handbuch*. Stuttgart: Alfred Kröner Verlag, S.229-244.

Keller, Ernst (1988): Das Problem »Verfall«. In: Ken Moulden / Gero von Wilpert (Hrsg.):  
*Buddenbrooks-Handbuch*. Stuttgart: Alfred Kröner Verlag, S.157-172.

伊藤白 (2014) 『トーマス・マンの女性像 — 自己像と他者イメージのあいだで』  
彩流社。

川戸れい子 (1998) 『『ブッデンブローク家の人々』論考 — 「教養市民層」の視点  
から —』 恵泉女学園大学『恵泉女学園大学 人文学部紀要』第 10 号、91 ～  
104 ページ。

木村靖二編 (2001) 『ドイツ史』山川出版社。

斎藤成夫 (2013) 「トーマス・マン『ブッデンブローク家の人々』 — 19 世紀ドイ  
ツ市民神話としての —」盛岡大学『盛岡大学紀要』第 30 号、21 ～ 29 ページ。

成瀬治ほか編 (1996) 『ドイツ史 2』山川出版社。

諸田實 (1974) 『ドイツ関税同盟の成立』有斐閣。

若尾裕司 / 井上茂子編 (2005) 『近代ドイツの歴史』ミネルヴァ書房。

(たかつじ・まさひさ 学習院大学科目等履修生)